

A. 反復流早産の疫学調査

清水 哲也
広井 正彦
玉田 太朗
浜田 宏

はじめに

反復流早産は周産期管理の上で重要な問題であり、かつ不育症の原因も構成している。現在まで習慣流産の定義は流産回数が3回以上というのが国際的な criteria のようである。しかし、2回以上流早産をくり返す反復流早産頻度に関する精度のよい疫学調査の報告は、最近出されていない。また、超音波診断や内分泌学の進歩により妊娠診断精度の向上をみ、いわゆる chemical pregnancy を含めた流産頻度が従来の疫学調査成績と異なってくる可能性がある。そこで今回、反復流早産の正確な疫学調査を行う目的で研究協力者の所属施設において実態調査を行い、必要な調査事項を抽出し、来年度より行う全国調査のための Pilot study を実施した。

調査方法

研究協力者が所属する5施設において、統一用紙によって実態調査を実施した。

後方観察的検討の対象は、chemical pregnancy を含む妊娠24週未満の流早産を2回以上有する症例で、少なくとも1回の流早産は当該施設で取り扱った症例のみを集計した。さらに妊娠24週以降27週未満の子宮内胎児死亡を2回以上有する症例で、1回は当該施設で取扱った症例のみを集計した。また調査期間は昭和56年1月より昭和60年12月までの期間とした。さらに、前方観察的検討を、1回以上流産または子宮内胎児死亡の既往歴を有し、今回妊娠で経過観察中、昭和61年11月より昭和62年1月の間に流産または子宮内胎児死亡に至

った症例の調査も並行して行った。

調査成績

1. 反復流産の頻度 (表1)

反復して2回以上24週未満の流産をくり返した症例ならびに24週から27週までの2回以上反復子宮内胎児死亡を来たす症例は、この調査期間に307症例であった。その中で2回流産の症例が65.8%と大多数を占めていた。いわゆる習慣流産の古典的定義である3回以上流産をくり返した症例はほぼ32%を占めていた。

2. 反復流早産における年齢分布 (表2)

これらの症例における年齢分布は、30歳未満が最も多く42.4%、ついで31歳から35歳までが39.6%であった。

3. 反復流産における妊娠週数 (表3)

この303症例における流産が終了した妊娠週数を検討した。今回調査した全流産は798例で、chemical pregnancy は1例も検出しなかった。最も頻度の高かったのは、妊娠6週から12週で70.1%を占めていた。ついで12週から24週20.4%と、妊娠6週から24週までが約90%を占めていた。

4. 不育症の頻度 (表4)

2回以上流早産を反復する307症例中、生児を得ていない不育症頻度は112例で36.5%の高頻度であったことは注目に値する。

5. 染色体分析 (表5)

染色体分析の行われた頻度は、307症例中70例(22.8%)と約1/4を占め、本人および夫の異常については5.7%に細胞遺伝学的異常が検出され

た。

6. 嗜好品 (表6)

タバコならびにアルコールの摂取頻度は7.2%と予想より低い頻度であった。

7. 流産の転帰 (表7)

調査施設で流産に終わった症例のなかで、流産に至る経過の明らかな症例の転帰を検討した。その結果、超音波電子スキャンで胎児心拍動を検出せずに流産に終わったものが277例中205例あった。また72例(26%)が胎児心拍動を検出した後に流産に陥った事実は注目に値する。つまり心拍動検出後の高い流産頻度を示す調査対象には、「一般集団」との異質性の存在が推定され、今後より広範囲な実態調査が必要と考えられる。

8. 調査施設の流産率 (表8)

研究協力者所属施設の調査期間における流産率を求めた。調査期間5年間の流産率は8.2%から10.4%の間を変動しており、この5年間の平均は9.2%であった。

ま と め

1. 調査期間が短期間であったため、前方観察的検討が不可能であったが、次年度からは調査期間を延長することにより、習慣流産の前方観察的検討が可能となることが期待される。
2. 年齢調査項目が不備なため、流産時年齢明記の要が指摘された。
3. 今後、流産の確率を流産回数の頻度ごとに求める必要がある。
4. 外来受診時週数が早期の場合や不育症患者においては、前方観察的検討においてchemical pregnancyを包括しうることが期待される。
5. 各施設における流産率調査において、妊娠12週を境に12週未満と12~24週未満に分類して集計する必要性が指摘された。
6. 不育症頻度はさらに検討の要がある。
7. 流産の転帰、ことに胎児心拍動検出後における流産転帰をさらに広範囲かつ詳細に調査する必要がある。

表1 反復流早産の頻度

(調査期間昭和56年-60年)

流産回数	例数	割合 (%)
2回	202/307	(65.8%)
3回	51/307	(16.6%)
4回	30/307	(9.8%)
5回	7/307	(1.6%)
6回以上	13/307	(4.2%)

反復子宮内胎児死亡 (24週-27週)

2回	4/307	(1.3%)
----	-------	--------

表2 反復流早産における年齢分布

30才未満	42.4%
31~35才	39.6%
36~40才	14.8%
40才以上	3.2%

表3 流産における妊娠週数

chemical	0	
6週未満	7	(0.9%)
6週~12週	559	(70.1%)
12週~24週	163	(20.4%)
24週以上	8	(1.0%)
不明	61	(7.6%)
計	798	

表4 不育症の頻度

112/307 (36.5%)

表5 染色体分析

分析頻度	70/307	(22.8%)
本人及び夫異常	4/70	(5.7%)

表6

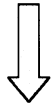
タバコ	22/307	(7.2%)
アルコール	22/307	(7.2%)

表7 胎児心拍動

FHM(+)	72/277	(26.0%)
(-)	205/277	(74.0%)

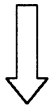
表 8 流産率

	56年	57年	58年	59年	60年	計
分娩28週以降	2723	2911	3110	3412	3316	15472
24週-27週	16	20	14	22	21	93
流産(24週未満)	318	299	279	315	362	1573
計	3057	3230	3403	3749	3699	17138
	10.4%	9.3%	8.2%	9.8%	9.8%	9.2%



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

反復流早産は周産期管理の上で重要な問題であり,かつ不育症の原因も構成している。現在まで習慣流産の定義は流産回数が3回以上というのが国際的な criteria のようである。しかし,2回以上流早産をくり返す反復流早産頻度に関する精度のよい疫学調査の報告は,最近出されていない。また,超音波診断や内分泌学の進歩により妊娠診断精度の向上をみ,いわゆる chemical pregnancy を含めた流産頻度が従来の疫学調査成績と異なってくる可能性がある。そこで今回,反復流早産の正確な疫学調査を行う目的で研究協力者の所属施設において実態調査を行い,必要な調査事項を抽出し,来年度より行う全国調査のための Pilot study を実施した。